

サテライトキャンパス先行事例 東京農業大学（北海道オホーツクキャンパス）

大学の研究領域（農学）と地域産業（農業・漁業）がマッチしたことで、実学に適した教育環境を提供。毎年約9割の学生が道外から入学しており、地域経済にも大きな経済効果をもたらしている。

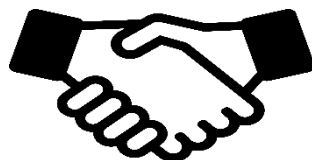
東京農業大学

北方圏の農業の研究・教育に力を入れるため、昭和57年に学長（北海道出身）のリーダーシップのもと、網走市に網走寒冷地農場（約20万㎡）を設置

平成元年、網走市に北海道オホーツクキャンパスを新設



農学という
大学の研究領域



農業・漁業という
地域産業

双方に大きなメリット

- オホーツクの自然をフィールドに、実学に適した教育環境
- 1学年約360人の学生が所属（定員充足率100%）
- 学生も、漁業や農業をはじめとするアルバイト等の学外の活動を通して人間力を養うことが可能

北海道網走市

網走市長から誘致

- 土地（約35万㎡）の無償提供
- 建設費用（約10億円）を提供
- バス・道路、生活インフラの整備

誘致



- 多くの若者が市内に流入（97%の学生が網走市外出身、約9割が道外出身者）
- アルバイトで1次産業の担い手として活躍
- 学生・教職員の生活消費や労働等によるオホーツク管内への経済効果は年間約226億円（大学調査より）

サテライトキャンパスの課題と工夫

- 複数キャンパスの運営により、管理運営費が増加
→ 現状市から運営に係る支援はないが、市の調査研究事業を受託（年間3,000万円程度）するなど、独立採算で運営
- 地域に就職の受け皿が不十分（8割超の学生が道外就職）
→ 地域の受け皿整備に向けて市の商工会議所等と連携
→ オホーツクキャンパスの学生についても、東京圏のキャンパスで就職サポートを行う等、オール「農大」で手厚く支援
- 学生の募集に課題
→ 説明会で保護者への広報を重点的に実施 → AO・推薦入試で面接を重視し、学生とのミスマッチを事前に解消

東京農業大学 オホーツクキャンパス

1. オホーツクキャンパス設置の経緯

- ・1982（昭和 57）年 網走市に寒冷地農場開設
- ・1989（平成元）年 オホーツクキャンパス開設
- ・学部は、生物産業学部（生物生産学科、食品科学科、産業経営学科）。

2. 現在、設置している学部学科等

- ・生物産業学部 北方圏農学科（定員：91 人）、海洋水産学科（定員：91 人）、食香粧化学科（定員：91 人）、自然資源経営学科（定員：90 人）
- ・生物産業学研究科 生産生物学専攻（定員：7 人）、アクアバイオ学専攻（定員：5 人）、食品香粧学専攻（定員：5 人）、産業経営学専攻（定員：3 人）、生物産業学専攻（定員：8 人）

※網走寒冷地農場、オホーツク臨海研究センター、食品加工実習棟も設置されている。

3. Q&A



Q.オホーツクキャンパス設置までの主な背景を教えてください。

A.- 学長と市長の強いリーダーシップでキャンパス設置-

- ・東京農業大学（以下「農大」）は、農学を中心に生命科学などを含めた専門大学です。2021（令和 3）年には創立 130 年を迎え、実学主義が建学の精神の一つです。
- ・かつて農大では熱帯・亜熱帯など「南の農業」を中心に研究していましたが、今から 40 年程前の学長（農業経済が専門）が北海道の紋別市の出身で、実家が酪農をしており、「農業は南だけではない、むしろ北の農業をこれからはやっていかなければ」という発想からスタートして、1982（昭和 57）年に網走市に寒冷地農場をつくったのがオホーツクキャンパスのきっかけです。
- ・その後、当時の網走市長からこれから若い人が減少するので農大に来てくれないかという依頼もあり、当時の学長と網走市長の強いリーダーシップがキャンパス設置をけん引しました。
- ・「土地・建物などハードの部分は行政が負担するので、ソフトの部分を大学がやってくれ」という役割分担で、1989（平成元）年にキャンパスを開設しました。大学としては、追加の人件費等を含め、2 億円程度の負担だったと聞いています。





Q. 設置にあたり課題となった点や、その課題をいかに乗り越えたのかを教えてください。

A. -教員確保が課題-

- ・オホーツクキャンパス開設にあたり、「そんなところにつくって学生や教員が集まるのか」といった指摘もありましたが、色々なエビデンスを集めて検討し、農大の他キャンパスからも教員が行くことにしました。そのため、本来の予定よりも1年設置が遅れました。
- ・教員については、農大の世田谷キャンパスから数人は行きましたが、約8割は新たに採用しました。北海道なので北海道大学からの採用は多かったですが、特定の大学にお願いするというものではありません。
- ・ただ、生物産業学部には当時の学長の強い思い入れで産業経営学科を開設しましたが、農大のルートでは教員が集まらず、他大学の経営学部長にご協力いただいて教員を集めました。
- ・開設後は、現在の様にオンライン環境が整っていなかったもので、世田谷キャンパスの教員が、夏季等にオホーツクキャンパスで集中講義を行う工夫などにより、教員集めの課題をクリアしつつスタートしました。



Q. オホーツクキャンパス設置や運営にあたり、地元地方公共団体等から受けた経費等の助成について教えてください。

A. -土地（35万㎡）や建設経費（約10億円）等-

- ・土地は元々原野だった約35万㎡程度の土地を網走市から無償提供されました。建物等の建設経費として約10億円の提供があった他、道路・水道・街灯などのインフラ整備やバス便の整備などは網走市に行っていました。
- ・運営費に関する経常的な支援は現状ありません。ただし、市の調査研究事業を年間3千万円程度受託しています。今後は光熱費補助などを期待しています。
- ・オホーツクキャンパスでも今の定員数を維持すれば黒字経営が可能です。





Q.オホーツクキャンパスがうまくいっている理由について教えてください。



A. -学問領域と地域産業のマッチ-

・オホーツクキャンパスがうまくいっている要因は、学問領域と地域の産業がマッチしているからだと思います。オホーツクだと、熊が出るから野生動物の研究ができるなど、大自然の中に行かなければできない勉強や研究を行いたいから学生は集まってきます。東京でも網走でも変わらない教育環境であればうまくいかない。仮に社会科学系や教員系の学部を網走市に設置していたら、たぶん10年持たなかったと思います。



Q. オホーツクキャンパスの地域への効果や教育上の効果等について教えてください。



A. -地域への経済効果は約 226 億円-

- ・農大が委託した調査会社の報告によれば、学生や教職員の消費活動で生じる経済効果が年間約 32 億円、学生のアルバイト活動やアパート等の生産拡大による効果が年間約 194 億円（農業 90 億円、漁業 45 億円、飲食店等 59 億円）。合計で、オホーツク管内への経済効果は約 226 億円です。
- ・網走市民の協力で建てたキャンパスなので、大学で寮を建てるのではなく、網走市内の民間のアパートに下宿してもらうことで、網走市民にも還元されるように考えています。95%以上の学生は下宿です。
- ・網走エリアの主要産業は農業と水産業で、ホタテ養殖業などの貴重な労働力として農大生の存在は大きいのです。このバイトでは、大学では教えられない人間力や社会性を学ぶことができると、大学としても考えています。学生にとっても時給の高いバイトとして人気です。



**Q. 地方のキャンパスには、学生が集まりにくいのではないかと
いう懸念がありますが、オホーツクキャンパスの学生募集の
状況及びノウハウについて教えてください。**



A. -保護者への広報を積極的に行うほか、面接を重視した入試を実施-

- ・1学年の定員は360人前後ですが、毎年、日本全国からの入学者で定員を満たしています。
- ・他キャンパスと異なり、オホーツクキャンパスでは面接を重視した入試を行っており、AOや推薦で多くの学生をとっています。どんなに優秀でも、網走に来てこんなはずではなかったと病んでしまう子もいるので、この環境で自分の目的を持って4年間過ごせることをお互いに確認するようにしていて、ミスマッチが少なくなっていると思います。
- ・広報は本人だけではなく、保護者向けにも実施します。オープンキャンパスの機会に、保護者に現地を見に来てもらいます。入学手続きの前に保護者も一緒に説明会を行うのですが、在校生の保護者にも説明してもらっています。その保護者が「悩んだけど、子供が行きたいと言うから行かせました。入学したら自立したと感じています。行かせて良かったです。」と言うと説得力があります。



**Q. 地方のキャンパスだと就職に課題があるとの声もあります
が、オホーツクキャンパスの学生の就職状況について教えてください。**



A. -オール「農大」で手厚く支援-

- ・現状では網走市内の受け皿がまだ十分ないので、オホーツクキャンパスの学生の8割以上は道外で就職しますが、東京圏の他キャンパスで就職サポートを行うこともできるので、東京圏の就職も「オール農大」で手厚く支援できます。地方だけの大学ならば、東京圏での支援はなかなかできませんが、本部が東京圏にあるからこそ、このような支援も可能です。
- ・もちろん、網走市の地元での就職にも力を入れています。網走の中小企業は地元の人が圧倒的に多く、社宅や家賃補助などの福利厚生が不十分だと思っているので、そのような支援を真剣に商工会議所を挙げてやってくださいとお願いしています。
- ・オホーツクキャンパスでは、大学へ行くか、友達と会うか、アルバイトするかくらいしかない。必然的に自分からコミュニケーションを取らざるを得ないのですが、これこそが社会で求められているものです。